

追悼文

末宗達行

「ちょっと、よろしいでしょうか。」

大学院ゼミではだいたい、報告担当者の報告が終わり、高林先生の意見、コメントがなされた後、出席している他の出席者に質問やコメントの機会が回ってくる。教室の後方から聞こえてくる冒頭の言葉と共に、手が挙げられる。結城哲彦さんは、およそこのようにして質問やコメントを述べられていた。ご自身の専門に関連するものばかりでなく、広く様々な分野の報告者に質問やコメントをされていたのが、今でも印象に残る。

結城さんが報告を担当される際には、報告と質問・コメントの時間をあわせた45分の間、ずっと立ち上がったままお話をされたり、聞かれたりしていたように記憶している。一椅子に座りたがりの私だからかもしれないが一立ち上がったままで報告を行うことや、質問や指摘の受け答えをすることは、思ったよりも疲れる。それなのに、人生の大先輩である結城さんは、私の記憶の限り、報告の際に座っている姿を見ることがなかった。いつただただらうか、高林先生が着席を促されていたのだが、結城さんが「報告や講義の際には、座らないようにしている」旨をお答えになり、あえて心がけてやっていたらっしゃることなのだ気づかされたことがあった。

それに加えて、報告の際にはいつも手元に書類の綴じられたバインダーがあったのも印象的だった。これもいつただただらうか、結城さんの手元のバインダーに何が綴じられているのが質疑の際に話題になり、博士論文の草稿だとお答えになられていた。博論提出のずいぶん前から草稿を書きあげられ、何度も何度も見直しされていたことは、結城さんの報告のたびに草稿の版数がどんどん更新されていたことから分かった。

留学生を含めた後輩の指導も熱心でいらっしゃった。大学院のゼミは6限で、終わる時間は定刻で19時45分、たいてい延びて20時ごろ。それから結城さんは教室に残り、レジュメや書籍を見ながら後輩の指導を熱心にされていたのを幾度となく見かけた。授業後だけでなく、8号館ラウンジやRCLIPのある19号館のラウンジでも。

今でも、報告担当者の報告が終わり、高林先生がコメントをされた後になると、

「ちょっと、よろしいでしょうか。」

この一言を待っている自分がある。

博士論文のテーマである営業秘密のみならず、知的財産法にとどまらない広い関心をお持ちになり、研究や後輩の指導に情熱を傾けてこられた結城さんのお姿が今も鮮明に思い起こされます。どうか安らかに眠りください。